

ドット・プローブ課題を用いた完全主義と選択的注意との関連の検討

—対人場面完全主義関連語を用いて—

坪田 祐基^{1,2)} 石井 秀宗³⁾ 野口 裕之³⁾

問題と目的

ものごとにしかりと取り組み、完全な成果をもたらそうと努力することは、人間にとって大切な姿勢である。一方で、いつも完全な結果を出すことは容易ではなく、完全でなければ全て失敗であると考え、多くのことを失敗であると考えられる結果となる。また、失敗することを恐れるあまり、物事に積極的に取り組めないという逆説的な結果も生み出しかねない。このように、完全であろうと過度に追求することは、現実の認知や行動を歪め、様々な形で不適応を生み出すことに繋がる。

このような問題は、「完全主義」という用語で定義されている。「完全主義とは、完全性への希求であり、完全主義者とは、生活のあらゆる側面で完全でありたいと思う人々である」(Flett & Hewitt, 2002)。完全主義は多くの心理・生理的問題 (e.g., 無気力症, 神経症, アルコール依存症, 思春期やせ症) と関連があると指摘されており (Pacht, 1984), 完全主義と不適応との関係が多く取り上げられている。

Shafran, Cooper, & Fairburn (2002) は、臨床的な観察から、不適応的な完全主義者の特徴を記述しているが、その内容は、以下のようにまとめられる。完全主義者は、設定した極めて高い基準がそうそう達成されないにもかかわらず、達成の追求に過度に依存する。この達成の追求を維持させる要因の1つとして、失敗への選択的注意がある。失敗への選択的注意とは、失敗ばかりに選択的に注目する注意バイアスである。完全主義者は、些細な失敗ばかりを選択的に拾い上げ、ある程度の成功は無視してしまう。その結果、完全主義者は主観的に失敗ばかりを経験することとなり、適応を大きく阻害することにつながる。

このように、選択的注意は、失敗したできごとや側面ばかりを抽出することに関わり、失敗に満ちた主観的な現実を構成させる。その後、その個人にとっての主観的な現実をもとに、バイアスのかかった目標設定や評価を行う。そのため、Shafran et al. (2002) が取り上げた完全主義者の抱える問題の中でも、失敗への選択的注意は、特に根幹をなす問題であると考えられる。

しかし、完全主義と選択的注意の関連を実証的に扱った研究は少ない。評定尺度法を用いた研究としては、Frost et al. (1997) のものがあるが、選択的注意が自動的で、無意識的なものであるという性質 (Mathews, 1990) を考慮すると、完全主義者の選択的注意を検討するためには、自己報告ではなく、より統制された実験場面での認知行動実験パラダイムを用いることが適切であると考えられる。

ところが、認知行動実験パラダイムによって完全主義者の選択的注意を検討した研究は、ほとんどない。数少ない研究としては、Lundh & Öst (1996) が、対人恐怖症患者に対して、情動ストロープ課題 (emotional Stroop test; Mathews & MacLeod, 1985) を用い、F-MPS (Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate, 1990) の得点と社会的脅威語 (e.g., “foolish”, “worthless”) への選択的注意との間に正の相関を見出している。また、Kobori & Tanno (2012) は、同様に情動ストロープ課題を用い、Multidimensional Perfectionism Scale (MPS) (Hewitt & Flett, 1991) の日本語版 (大谷・桜井, 1995) の自己志向的完全主義因子の得点が高い人の方が、失敗関連語 (e.g., 「失敗」, 「不成功」) に対して選択的注意を行うことを示した。

しかし、これらの研究には、2つの問題点が存在する。1点目は、用いられている課題が選択的注意の測定としては問題点が指摘されている (Cloitre, Heimberg, Holt, & Liebowitz, 1992; Ruiter & Brosschott, 1994; Wells

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 石井秀宗教授・野口裕之教授)
2) 日本学術振興会特別研究員 DC
3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

4) 本研究は、科学研究費補助金 (特別研究員奨励費, 課題番号 26・10337) の助成を受けて、実施された。

& Matthews, 1994) 情動ストループ課題に限られている点である。2点目は、完全主義者の認知は必ずしも不適応的にのみ働く1因子構造を想定できるわけではないにもかかわらず、Kobori & Tanno (2012) で用いられている刺激語が、ネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語) に限られている点である。

これらの問題点を解決するため、坪田・石井 (印刷中) は、ポジティブな完全主義関連語 (成功関連語) とネガティブな完全主義関連語 (失敗関連語) の両方に対する選択的注意を、ドット・プローブ課題 (MacLeod, Mathews, & Tata, 1986) を用いて検討した。その結果、男性では完全主義と選択的注意の間に関連が見られたが、データ全体と女性では関連が見られなかった。すなわち、完全主義と選択的注意との関連に性差が見られることを示唆した。

しかし、坪田・石井 (印刷中) が用いた成功関連語や失敗関連語は、「正解」、「達成」、「間違い」、「過失」といった、男性に特に馴染みの強い課題場面に関連したものであった。そのため、女性が本当に選択的注意を行わないのか、それとも用いられた刺激語が女性にとって馴染みが弱いためにもたらされた結果なのかが判然としない。そのため、女性にも馴染みの強い刺激語を用いることによって、完全主義と選択的注意の関連の性差についてさらに詳細に検討する必要がある。

そこで、本研究では、対人場面に関する成功関連語や失敗関連語に対する完全主義者の選択的注意を、ドット・

プローブ課題を用いて検討し、また、特にその性差に焦点を当てることを目的とする。

方法

本研究では、ドット・プローブ課題を用いて、対人場面完全主義関連語 (対人成功関連語, 対人失敗関連語) への選択的注意の度合いを測定する。また、質問紙により、完全主義を測定し、両者の関連を検討する。

実施時期

2015年7月から12月にかけて実験を実施した。

実験参加者

日本語を母語とする大学生100名 (男性50名, 女性50名) が参加した。平均年齢は19.02歳 ($SD = 1.04$, range 18-22) であった。

選択的注意の測定

実験課題 完全主義関連語に対する選択的注意の測定には、ドット・プローブ課題を用いた (Figure 1)。ドット・プローブ課題は、視覚的に2つの刺激を短い時間対呈示した後、いずれかの刺激が呈示された位置にドットや記号を呈示するものである。実験参加者は、そのドットの位置や記号の形を回答するが、この際に反応時間が測定される。2つの刺激のうち、より注意が向いていた刺激の位置にドットや記号が呈示された場合、回答まで

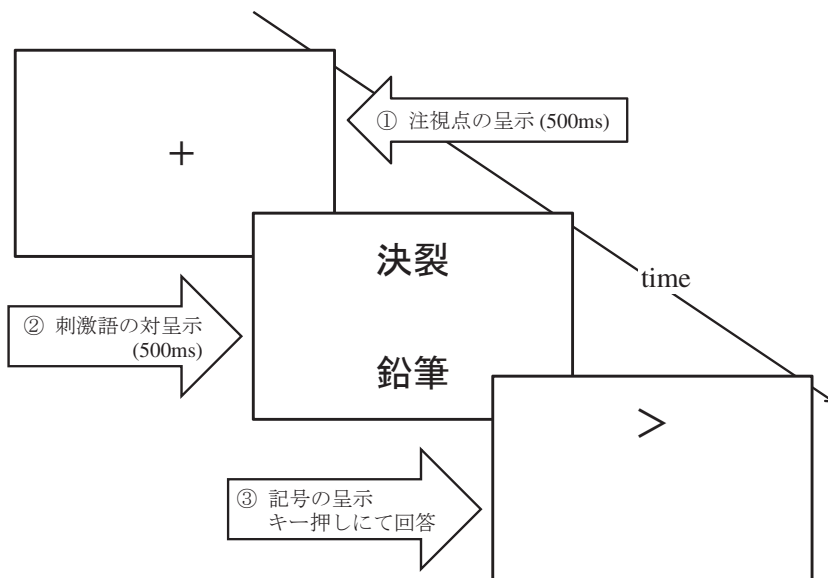


Figure 1 ドット・プローブ課題のシーケンス

の反応時間が短くなる。だが、注意が向いている方とは逆の位置にドットや記号が提示された場合には、回答までの反応時間が長くなる。このようにして、2つの刺激のうちの一つのいずれに対して選択的注意を行っているのかを測定する。

なお、今回の実験では、注視点は画面の中央に、刺激語は画面の中心に上下に対呈された。また、対呈された2つの刺激語のうち、上か下かのいずれかの位置に「<」か「>」の記号が提示され、記号の形に対応したキーを押すように教示した。なお、「<」とキーボードの“P”のキー、「>」と“J”のキーをそれぞれ対応するものとした。

提示時間 課題では、注視点と刺激語は500msずつ呈示され、記号は実験参加者が回答するまで呈示された。

刺激語 対呈される刺激には、対人成功関連語（「理解」、「円満」、「友好」、「親密」）、対人失敗関連語（「絶縁」、「決裂」、「対立」、「不和」）、中性語（「電卓」、「鉛筆」、「天気」、「新聞」）の3種類が用いられた。

刺激語の選定については、対人成功関連語と対人失敗関連語は、類語辞典（山口, 2003）を用いて選定した。また、中性語は、坪田・石井（印刷中）が刺激語に使用したものを参考に決定した。選定の際には、心理学専攻の教員1名、大学院生2名が、内容妥当性が確保されているか、極端に難しい言葉ではないかの確認を行った。

提示条件 刺激語の対呈示のパターンは、対人場面完全主義関連語（対人成功関連語、対人失敗関連語）と中性語、中性語同士のいずれかであった。また、対人場面完全主義関連語と中性語の対呈示に関しては、記号が対人場面完全主義関連語側に呈示される congruent 条件と、中性語側に呈示される incongruent 条件が区別された。そのため、対人成功-congruent 条件、対人成功-incongruent 条件、対人失敗-congruent 条件、対人失敗-incongruent 条件、中性条件（中性語同士の対呈示）の5条件があった。

試行数 5条件それぞれについて32試行、計160試行がランダムに行われた。

質問紙尺度

実験参加者は、完全主義の尺度3つについて回答した。

多次元完全主義尺度 Hewitt & Flett (1991) が作成した“Multidimensional Perfectionism Scale: MPS”の日本語版（大谷・桜井, 1995）のうち、「自己志向的完全主義 (SOP) 因子」の項目を用いた。15項目、7件法であった。

多次元自己志向的完全主義尺度 桜井・大谷 (1997) が作成した「多次元自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-Oriented Perfectionism Scale: MSPS)」を

用いた。MSPSは「完全性欲求 (Desire for Perfection: DP)」、「高目標設定 (Personal Standard: PS)」、「失敗懸念 (Concern over Mistakes: CM)」、「行動疑念 (Doubting of Actions: D)」の4因子からなっていた。20項目、6件法であった。

多次元完全主義認知尺度 小堀・丹野 (2004) が作成した「多次元完全主義認知尺度 (Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory: MPCCI)」を用いた。MPCCIは「高目標設置 (Personal Standards: PS)」、「ミスへのとらわれ (Concern over Mistakes: CM)」、「完全性追求 (Pursuit of Perfection: PP)」の3因子からなっていた。15項目、4件法であった。

手続き

実験参加者はドット・プローブ課題についての説明を受けた後、練習試行を10試行行った。練習試行の刺激は、本試行への影響を避けるために、1-7の数字がランダムに対呈された。その後、本試行が2つのセッションに分けて実施された。前半のセッションと後半のセッションではそれぞれ80試行が行われ、セッションの間には1分間の休憩が設けられた。ドット・プローブ課題終了後、実験参加者は、質問紙に回答した。

装置

実験では12.1型の液晶モニターが用いられた。実験参加者とモニターとの距離、ならびに対呈される刺激語間の距離は、画面の中央から、刺激語の中心までの視角がおおよそ7°になるように調整された。

ドット・プローブ課題の作成・呈示には、Millisecond社のInquisit 4が用いられた。

倫理的配慮

実験参加者には、実験への参加の自発性・任意性の保証、回答内容に関する匿名性の保証、研究への不参加・実験の中断に不利益がないことの保証を明記した研究同意書を示し、口頭でも説明した上でサインを求めた。

また、実験終了後に不快な情動を経験しなかったかの確認を行った上、実験者の連絡先を伝え、問題が生じた場合には問い合わせるように求めた。

なお、本研究は名古屋大学大学院教育発達科学研究科の定める倫理委員会の審査を経ており、承認を得ている（承認番号: 14-556）。

結果

質問紙尺度に関する結果

質問紙によって測定した完全主義の下位尺度ごとに

Table 1 完全主義尺度得点の基本統計量と Cronbach の α 係数

		全体 (n=100)			男性 (n=50)			女性 (n=50)		
		M	SD	α	M	SD	α	M	SD	α
MPS	SOP (自己志向的完全主義)	66.09	13.48	.91	65.70	13.74	.91	66.48	13.34	.92
MSPS	DP (完全性欲求)	18.20	4.77	.86	18.10	4.53	.81	18.30	5.03	.91
	PS (高目標設定)	19.30	3.90	.78	19.64	4.31	.82	18.96	3.46	.72
	CM (失敗懸念)	15.82	4.60	.80	15.76	3.92	.71	15.88	5.24	.85
	D (行動疑念)	21.34	3.87	.70	21.92	3.97	.72	20.76	3.71	.68
MPCI	PS (高目標設置)	12.53	3.03	.82	13.80	3.13	.82	13.26	2.94	.83
	CM (ミスへのとらわれ)	13.04	3.09	.79	13.34	3.07	.78	12.74	3.10	.81
	PP (完全性追求)	11.54	3.69	.90	11.66	3.65	.88	11.42	3.77	.91

※Mは平均値, SDは標準偏差, α はCronbachの α 係数を示す。

Table 2 各条件における平均反応時間の基本統計量

		全体 (n=100)		男性 (n=50)		女性 (n=50)	
		M	SD	M	SD	M	SD
対人成功条件	congruent	419.9	60.2	414.9	71.0	424.9	47.3
	incongruent	416.2	56.5	408.2	64.6	424.3	46.3
対人失敗条件	congruent	417.9	57.9	410.4	67.5	425.4	46.0
	incongruent	417.0	59.4	410.2	65.4	423.9	52.5
中性条件		417.0	58.6	410.2	67.0	423.9	48.5

※Mは平均値, SDは標準偏差を示す。

合計値を算出し、下位尺度得点とした (MPSのSOPは15-105点, MSPSの4下位尺度は5-30点, MPCIの3下位尺度は5-20点)。下位尺度得点の平均値と標準偏差, Cronbachの α 係数をデータ全体について、ならびに男女別に算出した。その結果をTable 1に示した。なお、 α 係数は、女性のMSPSの下位尺度のDを除くと、.70以上であり、それらの尺度の信頼性は十分であると考えられる。また、女性のMSPSの下位尺度Dの α 係数は.68であり、極端に低いわけではない。男性との比較可能性を保つために、既存の5項目をそのまま用いることとした。

ドット・プローブ課題に関する結果

反応時間データの処理 最初に、ドット・プローブ課題により、各実験参加者について得られた160試行分の反応時間データのうち、誤答を分析から除外した。次に、実験参加者ごとに、各条件の反応時間の平均値 $\pm 3SD$ より外にあるデータを外れ値として除外した。

これらの処理を加えた上で、各実験参加者の各条件の平均反応時間を、その実験参加者の各条件における反応時間の代表値とした。

平均反応時間の基本統計量 各実験参加者の各条件の平均反応時間の平均値と標準偏差を、データ全体について、ならびに男女別に算出した。その結果をTable 2に示した。

選択的注意の指標 個人の選択的注意の度合いを検討するために、中性条件と、それ以外の条件の平均反応時間の比を指標として用いた。具体的には、各実験参加者について、中性条件の平均反応時間を、対人場面完全主義関連語を含む各4条件 (i.e., 対人成功-congruent条件, 対人成功-incongruent条件, 対人失敗-congruent条件, 対人失敗-incongruent条件) の平均反応時間で割ることによって算出された。感情価のない中性語同士を対呈示される中性条件は、その実験参加者の課題の反応時間のベースラインを与えていると考えられる。そのため、この指標の大きさは、congruent条件の場合に

Table 3 選択的注意の指標コード

対人場面完全主義関連語	回答記号の位置	指標コード
対人成功関連語 (SS)	congruent	SSC
	incongruent	SSI
対人失敗関連語 (SF)	congruent	SFC
	incongruent	SFI

Table 4 選択的注意の指標の基本統計量

		全体 (n=100)		男性 (n=50)		女性 (n=50)	
		M	SD	M	SD	M	SD
対人成功関連語	SSC	0.994	0.042	0.990	0.043	0.998	0.042
	SSI	1.001	0.037	1.005	0.036	0.999	0.038
対人失敗関連語	SFC	0.998	0.040	1.000	0.033	0.997	0.046
	SFI	1.001	0.038	1.000	0.033	1.002	0.043

※Mは平均値, SDは標準偏差を示す。

は、その対人場面完全主義関連語に対する注意の程度を、incongruent条件の場合には、認知的な回避の程度を表す。なお、以降は記述の利便性を考慮し、対人成功関連語に“SS”，対人失敗関連語に“SF”，congruentに“C”，incongruentに“I”を割り当て、アルファベット3文字のコードで、この指標を表記することとする（e.g., 中性条件の平均反応時間を対人成功-congruent条件の平均反応時間で割った指標は“SSC”）。選択的注意の指標コードは、Table 3にまとめた。

選択的注意の指標の平均値と標準偏差をデータ全体について、ならびに男女別に算出し、その結果をTable 4に示した。

完全主義と選択的注意との関連

選択的注意と各下位尺度得点との相関 質問紙で測定した完全主義の各下位尺度得点と、ドット・プローブ課題で測定した選択的注意の指標の間のPearsonの積率相関係数をデータ全体について算出し、その結果をTable 5に示した。データ全体については、有意な相関が見られなかった。

また、男女別にも同様に算出し、男性の結果をTable 6に、女性の結果をTable 7に示した。

男性については、MSPSのCMとSSIの間に5%水準で有意な負の相関（ $r = -.29$ ）が見られた。

女性については、有意な相関が見られなかった。

考察

本研究の目的は、ドット・プローブ課題を用い、対人場面成功関連語、対人場面失敗関連語への選択的注意と、完全主義との関連を検討することであった。

その結果、全体のデータと女性のみデータでは有意な相関が見られなかった。また、男性のみデータでは、MSPSのCMとSSIの間に有意な相関が見られた。

男性で見られたMSPSのCMとSSIの間の負の相関は、失敗を懸念するほど、対人成功関連語に対する認知的な回避をしなくなることを示す。しかし、その相関係数の値（ $r = -.29$ ）は統計的に有意であるものの、実質的な関連が見られると言えるほど高いものではなかった。

これらのことより、完全主義傾向と対人場面完全主義関連語との関連は、性別にかかわらず見られなかったことになる。このことは、完全主義者は、対人場面では成功・失敗のいずれにも選択的注意を行わないことを示唆するものであった。坪田・石井（印刷中）の完全主義と課題場面に関する完全主義関連語への選択的注意との関連が、男性でのみ見られた結果と合わせて考えると、男性の完全主義者は、課題場面で選択的注意を行い、対人場面では選択的注意を行わないことが示唆された。一方、女性の完全主義者は、課題場面、対人場面にかかわらず、選択的注意を行わないことが示唆された。しかし、齋藤・沢崎・今野（2008）は、対人領域において、女性では適応的な完全主義が成功場面を内的かつ安定的に帰属する

Table 5 選択的注意と完全主義尺度得点との相関係数 (全体)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	SOP (自己志向的完全主義)	-0.09 [-.28, .11]	-0.05 [-.25, .14]	-0.04 [-.24, .16]	-0.06 [-.26, .13]
	DP (完全性欲求)	-0.04 [-.23, .16]	-0.06 [-.26, .14]	-0.07 [-.26, .13]	-0.10 [-.29, .10]
MSPS	PS (高目標設定)	-0.08 [-.27, .12]	-0.01 [-.20, .19]	.04 [-.16, .24]	-0.07 [-.26, .13]
	CM (失敗懸念)	-0.01 [-.21, .18]	-0.09 [-.29, .10]	-0.09 [-.29, .10]	-0.07 [-.26, .13]
	D (行動疑念)	-0.04 [-.23, .16]	-0.06 [-.26, .14]	-0.07 [-.26, .13]	-0.10 [-.29, .10]
	PS (高目標設置)	-0.09 [-.28, .11]	-0.11 [-.30, .09]	-0.02 [-.22, .18]	-0.11 [-.30, .09]
MPCI	CM (ミスへのとらわれ)	-0.08 [-.27, .12]	-0.13 [-.32, .07]	-0.06 [-.25, .14]	-0.02 [-.22, .18]
	PP (完全性追求)	.01 [-.18, .21]	-0.04 [-.23, .16]	.02 [-.18, .21]	-0.09 [-.28, .11]

※ [] 内は95%信頼区間を表わす。

Table 6 選択的注意と完全主義尺度得点との相関係数 (男性)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	SOP (自己志向的完全主義)	-0.25 [-.49, .03]	-0.05 [-.33, .23]	-0.05 [-.32, .23]	-0.07 [-.34, .21]
	DP (完全性欲求)	-0.21 [-.46, .07]	-0.12 [-.39, .16]	-0.07 [-.34, .21]	-0.14 [-.41, .14]
MSPS	PS (高目標設定)	-0.18 [-.44, .10]	-0.03 [-.31, .25]	-0.01 [-.29, .27]	.00 [-.28, .28]
	CM (失敗懸念)	-0.20 [-.45, .08]	-0.29* [-.53, -.02]	-0.05 [-.32, .23]	-0.27 [-.51, .01]
	D (行動疑念)	-0.21 [-.46, .07]	-0.12 [-.39, .16]	-0.07 [-.34, .21]	-0.14 [-.41, .14]
	PS (高目標設置)	-0.17 [-.42, .12]	-0.04 [-.32, .24]	-0.05 [-.32, .23]	-0.06 [-.33, .22]
MPCI	CM (ミスへのとらわれ)	-0.19 [-.44, .10]	-0.08 [-.35, .21]	-0.03 [-.30, .25]	-0.14 [-.40, .14]
	PP (完全性追求)	-0.14 [-.40, .15]	-0.05 [-.32, .23]	.01 [-.27, .29]	-0.07 [-.34, .21]

※ [] 内は95%信頼区間を表わす。

* $p < .05$

Table 7 選択的注意と完全主義尺度得点との相関係数(女性)

		SSC	SSI	SFC	SFI
MPS	SOP (自己志向的完全主義)	.07 [-.21, .34]	-.05 [-.33, .23]	-.03 [-.31, .25]	-.06 [-.33, .22]
	DP (完全性欲求)	.12 [-.16, .39]	-.01 [-.29, .27]	-.07 [-.34, .21]	-.07 [-.34, .22]
MSPS	PS (高目標設定)	.06 [-.22, .34]	.01 [-.27, .28]	.08 [-.20, .35]	-.14 [-.40, .14]
	CM (失敗懸念)	.13 [-.15, .39]	.05 [-.23, .32]	-.12 [-.38, .17]	.04 [-.24, .32]
	D (行動疑念)	.12 [-.16, .39]	-.01 [-.29, .27]	-.07 [-.34, .21]	-.06 [-.34, .22]
MPCI	PS (高目標設置)	.01 [-.27, .29]	-.19 [-.45, .09]	-.01 [-.28, .27]	-.15 [-.41, .13]
	CM (ミスへのとらわれ)	.05 [-.23, .33]	-.20 [-.46, .08]	-.09 [-.36, .19]	.07 [-.21, .34]
	PP (完全性追求)	.17 [-.11, .43]	-.03 [-.31, .25]	.02 [-.26, .30]	-.11 [-.37, .18]

※ [] 内は95%信頼区間を表わす。

ことを導くことがある一方で、男性では同様のはたらきが見られないことを指摘した。そのため、対人領域における完全主義のはたらきの性差は、選択的注意以外の要素によって見られる可能性があると考えられる。

本研究の課題

本研究では、認知行動実験パラダイムであるドット・プローブ課題によって完全主義と対人場面完全主義関連語への選択的注意との関連を検討し、関連が見られないことを示唆した。しかし、本研究で用いたドット・プローブ課題は、注意における定位過程(対象に注意を向ける過程)と解放過程(対象から注意を外す過程)を弁別して測定することができない。そのため、今回測定していた選択的注意バイアスが、どちらの過程におけるものかは判然としない。Posner (1988) の空間的注意のモデルでは、両者は区別されており、実際にそれぞれの過程は異なる脳部位の活動と関連していることが指摘されている(Posner & Petersen, 1990)。今後は、定位過程と解放過程を弁別して測定することのできる修正ドット・プローブ課題(Rudaizky, Basanovic, & MacLeod, 2014)を用い、より精緻に完全主義者の選択的注意を検討する必要があるだろう。

また、認知行動実験パラダイムは、実際の成功場面や失敗場面に対する選択的注意をそのまま測定しているわけではない。そのため、より実際場面に近い状況を実験

的に再現することによって、完全主義と選択的注意の関連を検討する必要があるだろう。たとえば、成功と失敗の入り混じった評価文章を読ませ、その際に完全主義者がどこにより長く注視を行ったり、自己評価がどのように変化したりするかを検討するといった方法が考えられる。

今後は、より精緻な認知行動実験パラダイムの方法を用いると同時に、実際場面に近い方法を用い、完全主義と成功・失敗への選択的注意との関連を検討する必要があるだろう。

引用文献

- Cloitre, M., Heimberg, R. G., Holt, C. S., & Liebowitz, M. R. (1992). Reaction time to threat stimuli in panic disorder and social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 30, 305-307.
- Flett, G. L., & Hewitt, P. L. (2002). Perfectionism and maladjustment: an overview of theoretical, definitional, and treatment issues. In G. L. Flett, & P. L. Hewitt (Eds.), *Perfectionism: theory, research, and treatment* (pp.5-31). Washington, DC: American Psychological Association.
- Frost, R. O., Marten, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, 14, 449-468.

- Frost, R. O., Trepanier, K., Brown, E. J., Heimberg, R., Juster, H. R., Makris, G. S., & Leung, A. W. (1997). Self-monitoring of mistakes among subjects high and low in perfectionistic concern over mistakes. *Cognitive Therapy and Research, 21*, 209-222.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology, 60*, 456-470.
- 小堀 修・丹野 義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み パーソナリティ研究, *13*, 34-43.
- Kobori, O., & Tanno, Y. (2012). Self-oriented perfectionism and its relationship to selective attention: An experimental examination using social cognitive paradigm. *Japanese Psychological Research, 54*, 418-423.
- Lundh, L., & Öst, L. (1996). Stroop interference, self-focus, and perfectionism in social phobics. *Personality and Individual Differences, 20*, 725-731.
- MacLeod, A., Mathews, A., & Tata, P. (1986). Attentional bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology, 95*, 15-20.
- Mathews, A. (1990). Why worry? The cognitive function of anxiety. *Behaviour Research and Therapy, 28*, 455-468.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1985). Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour Research and Therapy, 23*, 563-569.
- 大谷 佳子・桜井 茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, *66*, 41-47.
- Pacht, A. R. (1984). Reflections on perfection. *American Psychologist, 39*, 386-390.
- Posner, M. I. (1988). Structures and functions of selective attention. In T. Boll & B. Bryant (Eds.), *Clinical neuropsychology and brain function* (pp.173-202). Washington, DC: American Psychological Association.
- Posner, M. L. & Petersen, S. E. (1990). The attention system of the human brain. *Annual Review of Neuroscience, 13*, 25-42.
- Rudaizky, D., Basanovic, J., & MacLeod, C. (2014). Biased attentional engagement with, and disengagement from, negative information: Independent cognitive pathways to anxiety vulnerability? *Cognition and Emotion, 28*, 245-259.
- Ruiter, C., & Brosschott, J. F. (1994). The emotional stroop interference effect in anxiety: Attentional bias or cognitive avoidance? *Behaviour Research and Therapy, 32*, 315-319.
- 齋藤 路子・沢崎 達夫・今野 裕之 (2008). 完全主義と帰属スタイルおよび抑うつの関連の検討 目白大学心理学研究, *4*, 101-109.
- 桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, *68*, 179-186.
- Shafran, R., Cooper, Z., & Fairburn, C. G. (2002). Clinical perfectionism: a cognitive-behavioural analysis. *Behaviour Research and Therapy, 40*, 773-791.
- 坪田 祐基・石井 秀宗 (印刷中). 完全主義と選択的注意との関連の検討——ドット・プローブ課題を用いて——パーソナリティ研究
- Wells, A., & Mathews, G. (1994). *Attention and emotion: A clinical perspective*. Hove: Lawrence Erlbaum.
- 山口 翼 (編著) (2003). 日本語大シソーラス：類語検索大辞典 大修館書店

(2016年8月26日受稿)

ABSTRACT

Experimental analysis of relationships between perfectionism and selective attention using the dot-probe task and words related to social situations

Yuki TSUBOTA, Hidetoki ISHII and Hiroyuki NOGUCHI

Perfectionism is the striving for flawlessness, and extreme perfectionists are people who want to be perfect in all aspects of their lives. It is known that perfectionism is related to a number of psychological and physiological problems, such as apathy, neurosis, alcoholism and anorexia nervosa. A number of studies have investigated the relationship between perfectionism and maladaptation. Recent studies have suggested that perfectionists have certain cognitive biases, including selective attention to failure, which is particularly problematic. The few previous investigations of this problem based on the social cognitive paradigm had the shortcomings that the used task was limited to the emotional Stroop task, and used stimulus words were only negative perfectionism-related words (failure-related words). In order to overcome these problems, relationships between perfectionism and selective attentions to success- or failure-related words were investigated with the dot-probe task. The result indicated moderate correlations between perfectionism and selective attention to both success- and failure-related words in males, whereas little correlation was found in females. However, success- and failure-related words used in that study were associated with the task situation (e.g., “correct”, “achieving,” “mistake,” and “error”), which are familiar to male, but not to female perfectionists. Therefore, it is still unclear if the above result was caused by the fact that female perfectionists did not pay attention to successes and failures, or that the words used were not familiar to females. In order to resolve this issue, this study employed the dot-probe task and words related to social situations and investigated relationships between perfectionism and selective attentions. Undergraduates ($N = 100$, 50 female and 50 male) were asked to perform the dot-probe task and complete self-report questionnaires. In the dot-probe task, participants first focused on a central fixation cross that was shown on a computer screen. It was replaced by two stimuli after 500ms, which were displayed one above the other. For example, the screen displayed a word related to success in social situations and a neutral word. These words disappeared after 500 ms, and a symbol appeared on the screen replacing one or the other word. Participants should respond to the shape of this symbol as fast as possible. If a participant had tendency to pay more attention to such words related to social situations, reaction time to the words would be shorter when the symbol replaced a word related to social situations compared to when it replaced a neutral word. Three kinds of stimuli were used. The first group was words related to successful social situations such as “compromise” and “closeness”. The second group was words related to failures in social situations such as “isolation” and “friction”. The third group was neutral words such as “pencil” and “weather. Self-reporting questionnaires were also administered: Self-Oriented Perfectionism (SOP) items in the Multidimensional Perfectionism Scale (MPS), the Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale (MSPS), and the Multidimensional Perfectionism Cognition Inventory (MPCI). Ratio of

reaction time in neutral condition (neutral words vs. neutral words) to that in conditions including social situations related words (e.g., social situation failure- vs. neutral words) was computed as an index of selective attention. Pearson's product-moment correlation coefficients between this index and perfectionism scale scores showed almost no significant correlations in both males and females. These results suggest that perfectionists do not pay attention to success- or failure words in social situations. Sex differences in relationships between perfectionism and maladaptation in social situations would be caused by other factors such as behavior and consciousness.

Key words: perfectionism, selective attention, dot-probe task, social situation